

No.81

すくらむ

2014.3.発行



福井県特別支援教育センターは、県立病院関連四機関の4階にあります。

P1

特別支援教育センターの取組から

P2

シリーズ研修の報告

P3

高等学校での取組

P4

移行支援についての基礎知識 Q&A

実践研究発表会 報告

巡回指導について

当センターでは、園や学校を支えるために、所員が園や学校を訪問し、先生方や保護者の方と教育相談を行っています。その中で、児童生徒の状態や学校の状況に応じて巡回指導を取り入れるケースもあります。この巡回指導では、学校が実施する個別指導の支援を行います。週1回から月1回の頻度で定期的に所員が学校に出かけていき、所員による指導の実際をお見せしながら、学校の個別指導担当者による指導を支援します。

本年度は、小学校3校で3名の児童について巡回指導を実施しました。ある小学校での実践例を以下に紹介します。

ゆうちゃんは小学2年生の女子で、表現することばが少なく、先生の指示を理解することが難しい児童でした。巡回指導を行うにあたり、まずはじめにゆうちゃんの実態を把握するために、学級での授業を参観しました。センター所員は、ゆうちゃんの言動に注目し記録を取りながら、先生の指示に対するゆうちゃんの反応の仕方や、ゆうちゃんの周辺の児童との関係性、学習課題への取り組み状況などを把握しました。また、担任の先生を中心に、ゆうちゃんとかかわる先生方から、日頃の様子や、保護者の思いを聞き取りました。いろいろな情報の中に、ゆうちゃんの興味関心、得意不得意なことなど、指導内容を構成する手がかりが含まれています。これらの情報をもとに、先生方と一緒に個別の指導計画を作成し、巡回指導を始めました。はじめの数回はセンター所員が指導モデルを示し、個別指導担当者に見てもらいました。指導の後には、個別指導担当者と指導についての振り返りを行いました。そこでは、ゆうちゃんの反応を見て、指導の内容や、方法について検討し、次回の指導までに改善を加えました。このような、計画→指導→振り返りのサイクルを、数回、センター所員と個別指導担当者が一緒に経験しました。この結果、個別指導担当者は、ゆうちゃんの実態を把握し、担任や関係の先生方と相談しながら、個別指導を進めていくことができるようになりました。現在、ゆうちゃんは、通常の学級の授業の中でも学習意欲を落とすことなく、課題に取り組んだり、わからないことを担任に質問したりしています。個別指導担当者は、そんなゆうちゃんの姿を時折観察し、担任と相談して次の個別指導に活かしています。



シリーズ研修の報告

当センターで実施した、特別支援教育コーディネーターの養成研修「特別支援教育ベーシック研修」（年間6回のシリーズ研修）について報告します。

特別支援教育ベーシック研修

ベーシック研修は、初めて特別支援教育コーディネーターに指名された教職員や、園・校内でコーディネーター的な役割を担う教職員が、特別支援教育コーディネーターに必要な基礎的知識や技能を身につけることを目的に実施しています。

今年度は、幼稚園1名、小学校30名、中学校7名、高等学校8名、特別支援学校5名の計51名が研修を受講しました。所属校での実践を報告し合う場では、校内支援体制づくりについて意見交換をし、子どもの将来を見据えた支援について考察しました。各市町で行われている特徴的な取組などの他地区の情報や、他校種の情報を得る機会にもなりました。



研修でのグループ協議の様子

直接幼児とかかわったり、週案や記録に目を通したりして、担任の困り感を理解することを大切にしました。園全体が幼児理解に向けて協力的で、「笑顔で登園」を実現できました。幼児の「今」を大切に取り組みましたが、小中高と繋げていくことも勉強しなければと思いました。（幼稚園教諭）

校内支援委員会、校内就学指導委員会を計画的・継続的に繋げていくことで、組織が動き出し、協力体制が自然にできていくことを学びました。医療機関で診断を受けることよりも、小さな成長を定期的に保護者に返し、連携しながら家庭との関係を深めていくことが大切だと分かりました。担任が一人で抱え込まない支援体制づくりのためにも、特別支援教育についての計画を学校教育計画にしっかりと位置づけたり、職員間の情報交換や声かけを日常的に行ったりして、支援要請の手をすぐに上げられるような小規模校ならではの職員環境にしたいと思います。また、記録やファイリングについても整理していきたいです。（小学校教諭）

最終報告書から （成果と課題）



前年度まで生徒指導を担当しており、今年度初めて特別支援教育に携わることになった。戸惑いを感じながらスタートしたが、研修を受ける中で生徒を見る視点が変わり、徐々に対応できるようになった。また、研修で小・中学校での支援の状況を知ることにより、特別支援教育の重要性を再認識し、自分自身も責任感と使命感を感じることができた。同じメンバーで数回グループ協議をしたことで、経過が理解しやすく話が深まった。校内では広く教職員に呼び掛けて一緒に取り組み、特別支援教育が特別なものにならないようにしたい。（高等学校教諭）

今年度、特別支援教育コーディネーターとして、通常学級の気がかりな生徒にも目を配りかわってきたが、気がかりな生徒について、担任、教科担任、学年主任、保護者、専門機関等と連携をとりながら対応していくことへの難しさを感じている。学校職員全体が、生徒の特性について共通理解を図り、いろいろな立場からの視点を通して情報交換をし、支援の方法を考えていくことが望ましいと考える。学校職員全体が、職員会議等で具体的な対応の仕方やかかわり方を話し合ったり、対処法の適切なアドバイスを専門機関から学んだりする研修を積んでいかなければならないと思った。（中学校教諭）

校内支援会議の進め方について検討し、実践しました。会議の参加者同士で気がかりな児童のアセスメントや支援策を考えることができました。しかし、支援策を実行した後の、児童の変化の捉え方や支援策の見直しをしていくことのサポートが十分にできませんでした。個別の指導計画を作成し、それを活用しながら、支援会議を繰り返し行うことが必要だと思いました。（特別支援学校教諭）

このような参加のしかたもあります！

- ・校内での2人目の特別支援教育コーディネーターの先生が受講（小学校）
- ・特別支援教育コーディネーターには指名されていないが、連携して動くことが多い教育相談担当者や養護教諭が受講（小学校・中学校）
- ・次年度にコーディネーターに指名される予定の先生が受講（中学校）
- ・気がかりな生徒の保護者対応を統括することが多い学年主任が毎年参加（高等学校）

高等学校での取組



武生高校定時制の授業改善の取組～ユニバーサルデザインの授業づくりを切り口に～

武生高校定時制では、以前から多様な教育的ニーズのある生徒に対する適切な指導や支援を、授業の中にどう盛り込み、展開していけばよいのか、生徒一人ひとりの学習意欲を高めるためにはどうしたらよいのかということが課題となっていました。そこで、今年度、「分かる授業の実現に向けて～ユニバーサルデザインを取り入れた授業の改善～」という研究主題をかがけて学校ぐるみで取り組まれました。

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の工夫のポイントを各教科ごとに設定し、校内で公開授業・授業研究会も行いながら、生徒の見方や理解、かわり方、指導の工夫について学び合ってきました。当センター所員も校内研修を行ったり、授業研究会に参加するなどして一緒に取り組んできました。

その結果、生徒たちへの調査では、「授業が分かりやすい」「内容が面白い」といった評価のポイントが昨年度に比べて高くなりました。さらに、8割以上の生徒が、「指示や説明が分かりやすい」「板書や配布資料も適切である」と答えています。「生徒の参加状況がよくなった」「授業中の問いかけに対する発言が多くなった」「ペアワークができるようになった」という先生方の声もありました。

また、先生方も「生徒がどこでつまづいているのか気づけるようになった」「自分の思っていた以上に生活上得ている知識があった」「もっと自己表現したかったかも」と「～できない」ではなく、「～はできる」という生徒の姿の捉え直しができつつあります。ユニバーサルデザインの授業づくりについて学校ぐるみで取り組むことで、同じ教科の先生方との話し合いだけでなく、教科の枠を超えた先生方との協働が生み出されつつあります。何より、授業のことで語り、聴きあい、振り返ることができる時間が少しでももてるようになったことは、武生高校定時制の財産であり、武生高校定時制ならではのスタンダードを考えることにもつながります。

今後は、ユニバーサルデザインの手立てと教科本来の指導目標をどう結びつけるか、学んだことを定着させ、習得・活用までつなげていく取組が進んでいきます。さらに、自立や社会参画に向けた支援が必要な生徒との授業のデザインがこれから必要になってくるものと思われます。

授業改善の取組がこれからも続くことを期待しています。



県の取組から

県高校教育課では、本年度も、高等学校専門家チーム会を設置し、高等学校巡回教育相談会や、高等学校特別支援教育コーディネーター協議会を開催しました。

8月に、嶺北地区と嶺南地区に分かれて行った特別支援教育コーディネーター連絡協議会では、中学校と高等学校の特別支援教育コーディネーターが一堂に会しました。地区別のグループに分かれ、中学校から高等学校への移行の現状整理が行われ、これからの移行方法について協議されました。

その成果もあってか、中学校から高等学校への移行支援のためのケース会の設定の声が、あちらこちらから聞こえてきています。

保育園・幼稚園から、小学校、中学校、高等学校、大学や就労先へと、子どもたちの育ちや支援を引き継ぎ、さらなる成長を促し、子どもたちが生きやすい社会づくりが進むことが望まれます。



移行支援についての基礎知識 Q&A

Q 移行支援って何ですか？

A 障害のある人たちや特別な支援の必要な子どもたちに対して、就学前から就労まで指導・支援を一貫して行えるよう、次の支援の場に適切な指導・支援を丁寧に引き継いでいくことです。移行支援の際には、本人や保護者の同意を得ながら進めることが大切です。

Q 移行支援はいつ行うのですか？

スムーズな就学や進学等に向けて、入学前（1月～3月）に連絡会を開いて行います。担任が決まった後に、さらに具体的な支援内容について、新旧担当者間で引継ぎの会議をもって移行支援を行います。

Q 移行支援の会議はだれが参加するのですか？

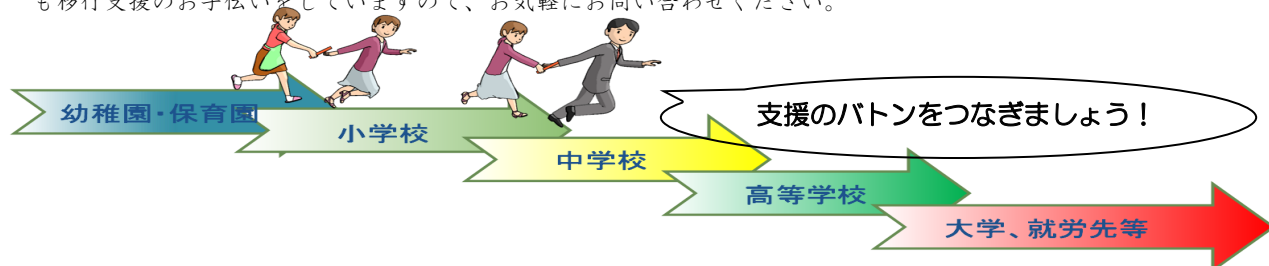
A 担任、特別支援教育コーディネーターをはじめ、主任、生徒指導主事など、お子さんや園・学校の状況やに合わせて参加者を検討します。情報伝達の漏れがないよう、少なくとも各校2名ずつ参加します。できれば、保護者も参加します。直接就学（進学）先の関係者と話をすることがあることで、保護者の安心感や信頼感が得られます。

Q 移行支援は、口頭でよいですか？

A 特に支援が必要なお子さんについては、送り出す側が移行支援シートを話し合いの資料として作成することが重要です。送り出す側の支援内容が明確になり、受け取る側も書面で残るので、担当者が異動等で変わっても引継ぎができます。

Q 具体的にどうすればよいかよく分からないのですが・・・。

A 平成25年3月に福井県教育委員会が作成した『移行支援ガイドライン』を参考にしてください。また、当センターも移行支援のお手伝いをしていますので、お気軽にお問い合わせください。



実践研究発表会 報告

平成26年2月14日（金）に福井県自治研究所において、「園・学校ぐるみで取り組む特別支援教育」というテーマで実践研究発表会を開催しました。幼保園から高等学校までの幅広い校種の先生方、福祉施設の方、教育委員会や教職大学院の方など、様々な分野から70名程度の参加がありました。

午前中は、坂井市高稜小学校の東角先生の、「特別支援学級担任と通常学級担任との協働による障がい理解学習の実践」の報告と、福井特別支援学校の山田先生の、「生徒が自ら考え、主体的に連携・協働しながら学んでいく取り組み～キャリア教育を見据えた模擬会社運営による実践～」の報告がありました。この2つの発表を基に、グループ協議を行いました。

2つの実践研究やグループ協議の報告を受けて、福井大学教職大学院の松木健一先生、笹原未来先生からご助言をいただきました。笹原先生からは「障害とは、人と人、人と物の間に発生するもの。子どもにとって身近なところで起こる戸惑いに対して、どう考え、どう解決していくかが障害理解授業になる」、松木先生からは、キャリア教育の4領域8能力の視点以外に、「ワークだけではなく、生活についても学校教育の中で支えていけるようにすること、様々な人間が合意形成していける能力をどのように与えるかを異質異能力異学年集団の中で考えていくことが大切」というご助言をいただきました。

「学校ごとにいろいろな状況があり、それぞれの学校で取り組まれていることが聞けて良かったです」と、グループ協議は好評でした。

午後は、敦賀気比高校の堂野先生、福井市森田中学校の上埜先生、鯖江市北中山幼稚園の大滝先生から、それぞれの園や学校での特別支援教育の取組についての報告がありました。また、嶺南東特別支援学校の河端先生から、授業リーダー研修の所属校での取組の報告と、当センターの野村より、その研究を支えた研修の取組を報告しました。

「幼、中、高でのそれぞれの実践を聞くことで、改めて一人ひとりの子どもの育ちをしっかりと把握した上で、見守っていかねばいけないと感じさせられました」「たくさんの実践研究を学ぶことができ、自分の研究にも照らし合わせることができました。何かを進めていくには、計画的に組織的に動いていくことが必要なのだと改めて気づきました」という感想がありました。

センターだより すくらむ 第81号

発行日 平成26年3月10日

発行所 福井県特別支援教育センター

所在地 〒910-0846 福井市四ツ井2丁目8-1

TEL (0776)53-6574 FAX (0776) 52-6272

E-mail info@fukuisec.jp